

O2-018

幼稚園児を対象とした、行動変容を促す
元気アップレンジャーショーの実践高橋 千春¹、長野 康平²、赤井 英恵¹、
菅家 理恵¹、近藤 奈津美¹、菊池 信太郎¹¹医療法人仁寿会 菊池記念こども保健医学研究所²山梨大学

【背景】

本来であれば、朝ごはんをきちんと食べることや食べ物の好き嫌い、運動や睡眠が大切であるといった基本的な生活習慣は、家庭で身につけるべきものであるが、近ごろでは家庭から教育・保育現場へ依存している状況を見受けられる。しかし現場では限界があり、基本的な生活習慣の獲得と子どもの健康に関する問題解決に向けた取り組みは十分に行えない。そこで、子どもに直接的に健康啓発を働きかけ、自ら行動変容を起こすような寸劇（元気アップレンジャー）を考案し実践した。

【目的】

レンジャーショーを通して、子どもの生活習慣に行動変容を促す

【対象】

福島県郡山市内にある A 幼稚園の園児

【方法】

食事・運動・睡眠などをそれぞれモチーフにした5人のレンジャーを起用。年間で8つの生活習慣に関するテーマの寸劇を実施（各回15分程度）。劇終了後、園児にワークシートを配布し家庭で振り返り学習を促した。幼稚園教諭と保護者に寸劇の効果に関する聞き取りを行った。

【結果】

1) 園児の発言：好き嫌いが多いと元気な身体が作れない、お菓子の食べ過ぎは良くない、遅くまで起きていると元気がでないなど。2) 教諭の感想：劇後テーマに関する会話や質問が増え、子どもたちの実践している様子がある、食事に興味を持った言葉が増加、これまでの促しでは不可能であった身体遊びを嫌う子が、劇後自ら外で遊ぶようになったなど。3) 保護者の感想：嫌いな野菜に挑戦するようになった、お菓子の量が多いことに気づき自ら減らした、一つ一つの生活習慣の要素を理解し始めた、ワークシートを実践することによって、親子での習慣作りができるようになったなど。

【考察】

いかに望ましい生活習慣を子どもに定着させられるかが子どもの健康教育の課題であり、地域医療としても生活習慣の改善は疾患予防に繋がるが、もはや家庭や教育・保育現場だけでは限界が見え始めている。子どもが興味を持つ寸劇を用いて直接的に行動変容が促せたことは、新しい健康教育のツールとなり得る。こうした寸劇は単回で終わることが多いが、一年間にわたり継続することで子どもに定着し、生活の中に浸透するようになった。子どもの健康は家庭・教育保育現場のみならず、地域医療側からも現場と連携を図りながら積極的に参画することが求められている。

O2-019

Patient Journey Map を作ろう

窪田 満

国立成育医療研究センター 総合診療部

【目的】

私たち医療者は、どのくらい患者とそのご家族のことを理解しているのでしょうか。当然であるが、疾患とはその人の一部でしかない。Patient Journey Map (以下PJM) とは、患者・家族にこれまでの人生を振り返っていただき、診断に至る前から、その後の治療や生活面での苦悩まで、その人生に関する語りをグラフィックファシリテーションの手法を用いて可視化したものである。グラフィックファシリテーションとは、会議などで話される内容を、絵で表現することでリアルタイムに可視化し、場を活性化させ、議論を深め、共感や相互理解をうながす方法である。今回、第一三共株式会社の協力を得て、PJM の作成を行った。

【方法】

2017年11月7日、第一三共株式会社品川研究開発センターに2名の先天代謝異常症の患者・家族に来ていただいた。それ以外に、患者会のメンバー、有志の医師・看護師、そして同社の社員が集まり、2名の先天代謝異常症の患者・家族の語りを聴きながら、グラフィックファシリテーターの山田夏子さんに、絵を描いていただいた。

【結果】

お一人1時間半ずつ、患者・家族の語りを拝聴した。山田夏子さんによって、その語りがそのまま、リアルタイムに模造紙8枚の絵に描かれていった。

【考察】

語りが絵になることによって、理解されにくい稀少疾患であっても、第三者がその人生を理解しやすくなった。さらにその話の後、聴衆がその絵に自分の思いを描き込むことで、「繋がり」を実感することができた。患者・家族の語りを共有し、コミュニケーション、パートナーシップを形成するのに有効な手段であると考えられた。また、患者が自分自身を振り返ることにより、自分の疾患を理解するのに有用なツールという認識でいたが、それだけではなく、PJM を使用して他人に伝えることで、入学や就労というような人生の節目に何があったのか、つまり、疾患ではなく、疾患と共に生きてきた人生を他人に理解して貰うためのツールであることがわかった。それは、PJM を作成されたご家族が、学会で患者会代表として特別講演をされた際に、PJM を用いてわが子の説明をされ、より理解が深まったことで明確になった。製薬会社の社員にとっては、これまでより患者さんを意識して業務に臨むモチベーションができたと答えた方が80%以上いた。PJM の持つ力は非常に大きく、今後、移行期医療の際にも非常に役に立つと考えられた。